

四国遍路国際シンポジウム関連展示

四国遍路と弘法大師信仰

後期展

◆主催 愛媛県
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター
「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会

◆会場 愛媛大学ミュージアム
◆後期展会期 令和元年12月25日～
令和2年1月27日

2015年、「四国遍路」は文化庁によって「日本遺産」に、観光庁によって「広域観光周遊ルート」に認定され、2016年には、「四国八十八箇所霊場と遍路道」を世界遺産登録候補となるように、四国4県58市町村が文化庁に提案するなど、四国遍路への注目度は益々高まっています。

愛媛県歴史文化博物館は、1994年の開館以来、常設の展示室を設けて、四国遍路の歴史と文化を分かりやすく紹介するとともに、資料の収集、学芸員の調査研究の成果として、重点的に四国遍路をテーマとした企画展を実施してきました。また、愛媛県内の札所寺院の文化財調査では県教育委員会と連携を密にして、四国遍路に関する情報を交換し、相互協力を図り、さらに、博学連携の取り組みとして、愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センターと協力して、遍路資料の合同調査、資料整理、展示公開などの活動を行っています。

愛媛大学開学70周年と愛媛大学ミュージアム開館10周年、全学文系センター開設にあたる本年は、愛媛県とセンター、協議会が協力をして、弘法大師信仰をテーマにして四国遍路の歴史を紹介します。前期展（8月7日～12月23日）はセンター所蔵品を中心に、後期展（12月25日～1月27日）は、愛媛県歴史文化博物館の所蔵品を中心に、愛媛県内の霊場の文化財も交えながら展示します。これまでの研究成果の一部をわかりやすく公開することで、愛媛県や愛媛大学、四国4県の活動について御理解をいただく機会となれば幸いです。



1 愛媛県指定有形文化財

絹本著色弘法大師像

鎌倉時代 13世紀

四国霊場第52番札所太山寺蔵

空海の入定直前に高弟の実恵に請われて、同じく高弟の真如親王が描いたと伝えられる弘法大師空海の肖像画。顔を右に向け、襟元の開いた褐色の法衣と同色の袈裟を着け、五鈷杵を持った右手は胸前で捻り、左手には念珠を執り、牀座に座す空海の姿が描かれている。この弘法大師御影は「真如親王様」と呼ばれ、弘法大師像の典型的図様として流布した。天曆5年（951）建立の醍醐寺五重塔の初層に描かれた真言八祖像中の図が現存最古とされる。本図は四国内に現存する弘法大師画像として最古で大幅の作例である。2016、2017年度に文化財修理が行われた。



愛媛県歴史文化博物館 四国遍路資料コレクション

絵図から見た四国遍路

四国遍路が次第に庶民に普及していく江戸時代以降、四国遍路を対象とした様々な案内記や絵図が誕生した。とくに四国遍路の全体像や札所への道筋を実際に描いた絵図の刊行は、視覚的に理解しやすくすることに大きな意義があった。また、四国霊場の札所や弘法大師ゆかりの旧跡などを描いた札所絵図も誕生し、札所の名所・観光地化に影響を与えた。四国遍路絵図は遍路の土産品としても買い求められた。

一方、藩領絵図や村絵図には、江戸時代における伊予の遍路道のルートや番所の姿が描かれており、地域における四国遍路の実態を明らかにする重要な絵画史料として注目されている。



2 細田周英「四国^{へんろ}遍禮絵図 全」 宝暦13年（1763）

現存する四国遍路絵図の中で刊行年が記されている最も古い絵図。四国の形は南を上、北を下、東を左、西を右という配置で、本州の中国地方から四国を眺めたようにデフォルメされて描かれている。四国八十八ヶ所の札所と遍路道が描かれ、城下、番所、国境、山坂峠、村里、名所、番外札所、港の名前、札所間の里程などが克明に記され、江戸時代の四国遍路絵図の中で最も詳細な内容となっている。作者は但馬（兵庫県豊岡市）出身の細田周英で、西国巡礼には絵図があるのに対して四国遍路にはそれがないことから本図を作成した。四国遍路の全体像をはじめて詳細に視覚化した意義はとて大きい。



3 四国^{へんろ}遍禮絵図 江戸時代後期 18-19世紀

伊予国の篠山道沿いで作成された四国遍路絵図。版元は伊予宇和島領風部（おろしべ）村（愛媛県宇和島市津島町）の虎屋喜代助。彫刻は備前和気郡香登本村（岡山県備前市）の立蔵直貫。遍路道は彩色され道筋が明示されている。第40番札所の観自在寺参詣後、遍路道のルートが3本（中道、篠山道、灘道）あり、篠山には篠山神社、観世音寺があり、初めての遍路は、月山神社（おつき）か篠山神社（おささ）を参詣する習わしがあり、篠山道は多くの遍路が利用した。



4 四国^{へんろ}へんろ絵図 江戸時代後期 18-19世紀

四国霊場第43番札所の明石寺周辺で刷られた四国遍路絵図。絵図の上側は東（阿波）、下側は西（伊予）、左側に北（讃岐）、右側に南（土佐）を配置する。下側中央に伊予小富士（興居島）が位置し、九州地方から四国を見たような縦長の構図となっている。絵図中央に天蓋付の弘法大師御影、周囲に八十八ヶ所の札所と遍路道、札所間の距離、城下、名所、国境、番所などが描かれ、部分的に彩色されている。埋木による刊記部分に「四十三番札所」とある。



5 象頭山参詣道四国寺社名勝八十八番 江戸時代後期 18-19世紀

本図は象頭山金毘羅参詣（金刀比羅宮）と四国遍路をセットにした案内絵図。「金毘羅小坂美玉堂」とあり、金毘羅参詣のお土産用として作成されたものと考えられる。当時、四国遍路とあわせて金毘羅参詣する旅人が多かった。タイトルに「寺社名勝」とあるように物見遊山的な雰囲気を漂わせている。讃岐十ヶ所参りなどの各地域の小規模巡礼や、女性遍路のための女人札所（四国霊場第24番最御崎寺と第26番金剛頂寺付近）が記載されている。



6 四国遍路道中図 大正6年（1917）

大阪の駈々堂から旅行案内図として発行された四国遍路絵図。表面には、四国を旧国名別に色付けをして、四国八十八ヶ所霊場の札所、本尊の略式御影、順拝の道筋、札所間の距離（里丁）、番外札所、名所旧跡、鉄道及停車場、電気軌道、道路、都市、宿駅、河川、燈台及海岸、港、上陸港と札始め・打ち留め情報などが記されている。「四国参拝は順に一番より始めるも逆に八十八番よりなすも中途何れの札所より始めても随意」とあり、裏面には、各札所の御詠歌が記されている。



7 吉田初三郎「四国八十八ヶ所霊場案内及名勝史蹟交通鳥瞰図」 昭和9（1934）年

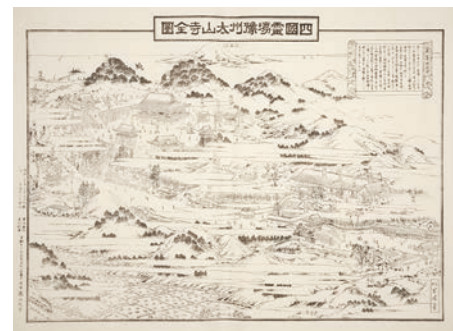
「大正の広重」といわれた吉田初三郎による四国霊場の鳥瞰図。携帯の利便性を考え、横に長い折り畳み式のものは初三郎の創案である。北を上にし、高知沖の遙か上空から四国全体を眺めたようなパノラマの構図となっている。遠くに富士山、朝鮮半島まで描き込まれている。

八十八ヶ所の札所は伽藍配置を踏まえた境内図が立体的に細かく描き込まれている。鉄道、大阪商船の航路、道路を走る自動車などが描き込まれ、当時の四国遍路を取り巻く近代交通網の様子が見てとれる。



8 四国霊場第四十五番伊予国浮穴郡海岸山岩屋寺勝景大略図 江戸時代後期～明治時代 18-20世紀

絵師は百井左水。本図の構図は、両界曼荼羅にならない画面中央に金剛界嶽、左下に胎藏界嶽を描き、岩屋寺とその周辺の独特な景観を一枚の絵図にうまくまとめている。本図には明治26年版、同39年版、無刊記版などがあり、岩屋寺には版本が現存する。



9 四国霊場豫州太山寺全図 明治30年（1897）

参詣者で賑わう四国霊場第52番札所太山寺とその周辺を鳥瞰図のスタイルで細密に描いた銅版絵図。「太山寺略縁起」が記され、広い境内には鎌倉時代建立の本堂などの荘厳な伽藍が描かれている。また、瀬戸内海に浮かぶ小富士（興居島）、高浜港に停泊する汽船、伊予鉄道の「坊っちゃん列車」が走る姿などもみとれる。本図は近代の松山地方における海陸交通環境の整備進展を背景として、中国・九州方面からの上陸地に最も近い四国霊場太山寺の特色が見事に描き込まれている。



10 松尾峠から城辺村までの絵図 江戸時代後期 18-19世紀

宇和島藩が測量をもとに作成した縮尺約6,000分の1の分間図で、伊予の遍路道の起点となる松尾峠から城辺村（愛南町）までの道が描かれている。この道は、四国霊場第40番札所観自在寺（愛南町）に向かう遍路が歩くルートに当たる。平野や盆地を黄色、山地を緑色で塗り、濃淡を使うことで、尾根筋などを立体的に表現している。本図で注目されるのは松尾峠の描写。国史跡のルートより西側の尾根筋に赤色で道が描かれており、江戸時代の遍路道を示すものとして注目される。



松尾峠（部分拡大）



東多田番所（部分拡大）



11 東多田村絵図 江戸時代 17-19世紀

宇和盆地の北部に位置する東多田村（西予市）を描いた絵図。道路を赤色、山を薄墨色、田を現在の地図記号と同じ縦線2本、屋敷まわりの畑を黄色で表現している。中央を蛇行しながら横切る赤色の線が宇和島と大洲を結ぶ街道である。この宇和島街道は遍路道でもあった。宇和島街道の中ほどに茅葺きの大きな家が描かれているのが、宇和島藩が設けていた東多田番所。番所に隣接して、遍路を拒むかのように、長大な竹矢来が設けられている。